

上代語シク活用形容詞語幹の性質について

于 艶 麗

1. はじめに

形容詞は、性質・情態、感覚・感情などを表し、独自の活用を有する品詞である。その種類にはク活用とシク活用があり、シク活用は、ク活用と比べて、その発生・発達が遅れたと見られている。意味的には、ク活用をする語は情態的な属性概念を表すことが多く、シク活用をする語は情意的な意味を含む傾向があるといふことがほとんどの先行研究に指摘されている。たとえば、山本俊英「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」(1955)では、「ク活用に属する語は、状態的な属性概念をあらわし、シク活用に属するものは、情意的な面をあらわすのが、大部分である」と述べている。しかし、シク活用形容詞の中には、状態の意味を持つものも存在している。また、形容詞の持つ情意的も語によってさまざまである。上代において、どの種類の語彙がシク活用形容詞になりやすいのか。本稿は形容詞の成立をめぐって、上代語シク活用形容詞語幹の性質について考察してみたい。

『時代別国語大辞典上代編』に収録されているク活用形容詞は156語であり、シク活用形容詞は142語である。上代語シク活用形容詞とク活用形容詞は、活用形式だけでなく、語構成と意味の上でも大きく異なっている(表1を参照)。語構成からみると、ク活用形容詞の語幹は独立性が高く、「し」は付属的な存在である。それ故、「語基+し」の造語形式を一般的に用い、「名詞+形容詞」が多く見られ、接辞との結合性もよい。これに対して、シク活用形容詞は、情意性を表す語基が多く、独立性に乏しいため、「し」との結合がより緊密的であり、「し」は語幹の一部と見るほうが妥当である。シク活用の発生・発達はク活用形容詞より遅れたと言われ、「動詞未然形(被覆形)+し」といった動詞から派生した形容詞と、「ながながし」「とほとほし」のようなク活用語幹を重ねて用いる量語形容詞などの存在は、シク活用形容詞が二次的なものと見るべき根拠となる。したがって、シク活用形容詞は上代において、接辞との結合はほとんど見られず、複合形容詞に用いる語彙も、かなり限られている。次は、シク活用形容詞の語幹を単純形式と合成形式に分けて、さらに詳しく分析する。

2. 単純形式の語幹の性質

2. 1 名詞の場合

例 いさをし ときじ ほかし われじ

○いさをを【傑】(名) 勇ましい男。気力のすぐれた男。勇Ⅱ男。

○いさをを【功・勤】①勇ましく雄々しい。②勤勉である。③てがらがある。

○ほか【外】(名) 外側。ある境界の外側。

○ほかし【他】普通と異なる。外を形容詞化したもの。

○とき【時・期】(名) 機会。それにふさわしい時期。それらしい季節。

○ときじ【不時・非時】時が形容詞語尾ジをとったもの。(a) 時を選ばない。絶えまない。(b) 時ならず。その時でない。時節はずれである。

○われ【吾・我】(代名) 一人称。ワに同じ。

○われじ わがことであるかのようにだ。反射指示の代名詞ワレに、形容詞構成の語尾ジが接したものの。

語例から見ると、名詞から形容詞を形成する場合、意味の成立は二通りあると考えられる。一つは、名詞の備えている性質を強調的に抽出したもので、その名詞は象徴的な存在である。もう一つは、名詞が表す概念と類似するか異なるかの判断からきたもので、その名詞は標準的な存在である。前者(抽出)の場合、評価的情意性を帯びる傾向が見られるに対して、後者(類似)の場合、状態性の形が多いように思われる。

ちなみに、「じ」は、体言に接して、「〜らしいさま、〜のようなさま」の意の形容詞を作る語尾である。山崎馨(1984)が挙げた名詞系形容詞のD群として、「名詞+じ」の形容詞は十数語挙げられている。この種類の語と「じ」の意味について、山崎馨(1984)は次のように述べている。

この一群の語は、紛れもなく名詞が濁音語尾ジを伴ったシク活用の形容詞であるが、形容詞としては十分な発達、継続を見せないままに衰亡して、平安時代以降にはほとんどその痕跡を残さなかった。(中略) その特異な濁音語尾ジは、助動詞「じ」「ましじ」などの「じ」と本来は同一のものであったと考えられ、否定的状態を指定する接辞として「それではないが、そのようだ」という意味を表わしている。

(『研究資料日本文法』 pp.9-10)

2. 2 副詞の場合

例 こきだし はなはだし まだし

○こきだ(副) 多く。沢山。程度のはなはだしさを意味する用い方もあったか。

○こきだし 重大である。きわめて大切である。

○はなはだ【甚・太】(副) はなはだ。非常に。

○はなはだし【甚】 はなはだしい。極度に異常だ。

○まだ 『時代別国語大辞典上代編』の見出し語に見当たらない。○まだし 時節がまだそこまで至らない。時期尚早である。

語例から見ると、数量、程度、時間を表す副詞はシク活用形容

詞の語幹に現れた。『時代別国語大辞典上代編』(1967)に収録されていないが、ほかに「いまだし(未)」「ほとほとし(殆・幾)」もあつたようである。また、「まだし」について、『時代別国語大辞典上代編』(1967)で「ク活用のマダシもあつたようにみえるが、連体形に相当するかと思われる形しか見られず、多くはそれも体言的に用いられて、形容詞と認めてよいものであつたかどうかは疑わしい」と記述されている。実は、副詞からきた形容詞の多くは、シク活用形容詞には定着せず、本来の副詞に戻つてしまつた。また、中世語においてク活用とシク活用の両活用がある形容詞に「はなはだし」「うてたし」がある。意味から見ると、形容詞化したと言つても、基本的には副詞とほぼ同じ意味を表す。形式の上だけは形容詞的に整えられる必要があつたため、副詞の語幹となつたもので、「シク活用」となることが絶対的に必要な条件ではなかつたように思われる。

2. 3 動詞の場合

① 心的状態や心理活動を表す動詞

例 あさまし いきどほろし いつくし いとはし いとほし
うらめし うらやまし くやし こひし こほし さびし した
ゑまし なぐし なつかし なやまし はづかし むつまし め
づらし めだし よろこほし わびし

○あさむ 『時代別国語大辞典上代編』の見出し語に見当たらない。
い。

○あさまし 未詳。浅マシで、冷淡・意外だ、などの意か。

○いきどほる【懐愔】(動四) 心中に不満や憤懣がふすぶる。心

が晴れない。

○いきどほろし 心が晴れない。憂鬱である。

○いづく【斎】(動四) ①けがれを忌み、清浄に祭り仕える。②
大切にする。愛護する。

○いつくし【厳】 厳然としている。威厳がある。

○いとふ【厭】(動四) 厭う。嫌う。忌まわしく思う。

○いとはし【厭】 厭わしい。いやに思う。

○いとほし 苦痛・煩悶などにたえられない、つらくてたまらな
い気持をあらわす。イトフから派生した形容詞。

○うらむ【怨・恨】(動上二) うらむ。不満を持ち憎く思う。心
が活用した語であるう。

○うらめし【恨・恹】 恨めしい。うらみに思われる。残念である。

○うらやむ【嫉妬】(動四) そねむ。にたむ。

○うらやまし【妬忌】 ねたましい。

○くゆ【悔】(動上二) 後悔する。残念がる。

○くやし【悔】 残念だ。心残りだ。くやしい。

○こふ【恋】(動上二) 思い慕う。眼前にないものに心惹かれる
ことをいう。特に異性を思う場合に用いられることが多く(下
略)

○こひし【恋】 こいしい。慕わしい。コホシとも。

○こほし こいしい。心惹かれる。

○さぶ(動上二) ある状態が勢いの赴くままに、とめどもなくひ
たむきに進むことをいう。①感情が荒れずさんでいく。②静か
に奥ゆかしく振舞う。

○さびし サブシの転か。

- したゑむ (動四) 心のうちに喜びが満ち溢れること。
- したゑまし【下咲】 心中に喜びが溢れるさま。
- なぐ (動上二) ①心や恋が静まる。おさまる。やわらぐ。穏やかになる。②海が穏やかに静まる。
- なくし【和】 穏やかである。平穩である。和グからの派生か。
- なつく【馴】 (動四) 馴れ親しむ。親しみ近づく。
- なつかし 心ひかれて離れがたい。
- なやむ【悩】 (動四) なやむ。苦勞する。精神的なことにもいうが、本来病気による肉体的な苦痛をいうか。病む。わずらう。
- なやまし【不平・阻】 ①苦しい。障害にあったり、病気にかかったりして苦しむのいう。②官能を刺激して心を悩ませる。
- はづ【恥・羞】 (動上二) 恥じる。恥ずかしがる。
- はづかし【恥じ】 恥ずかしい。きまりがわるい。
- むつぶ【親・睦】 睦ぶ。親しむ。仲よくする。【考】 ムツムの形もある。
- むつまじ【親・睦】 睦まじい。親密な。親しい。仲がよい。
- めづ【奇】 (動下二) 感心する。心ひかれる。愛する。
- めづらし【珍・希見】 ①心ひかれる。可愛らしい。②珍しい。たぐいまれである。
- めだし 愛すべきだ。ほめるべきだ。
- よろこぶ【喜・歓・悦】 (動上二) 喜ぶ。快く感じる。
- よろこぼし【悦】 喜ばしい。
- わぶ【侘】 (動上二) ①困惑する。迷惑する。②ある事柄が思い通りにならないで落胆する。心情についていう場合。
- わびし わびしい。がっかりしている。

動詞の場合、心的状態や心理活動を表す動詞から派生したものが多し。「いとふーいとほし」のように、形容詞はその心理状態を引き起こす対象について用いられる場合もあれば、「はづーはづかし」のように、両方主体の情意を表す場合もある。また、「あさむーあさまし」「いきどほるーいきどほろし」「いとふーいとほし」「くゆるーくやし」「こふーこひし(こほし)」「うらむーうらめし」「うらやむーうらやまし」「したゑむーしたゑまし」「なぐーなくし」「はづーはづかし」「むつぶーむつまじ」「めづーめだし」「よろこぶーよろこぼし」のように、意味が完全に対応しているものがほとんどであるが、形容詞の意味は動詞のそれと少しずれが生じていることもある。

② 思考・願望などの精神活動を表す動詞

- 例 うたがはし おもほし くすばし たのもし ねがはし
 喜怒哀楽などの心理状態を表す動詞のほかに、外部世界に対する思考や願望など、精神活動を表す動詞も見られる。
- 〔思考を表すもの〕
- うたがふ【疑】 (動四) 疑う。あやしむ。
 - うたがはし【疑】 疑わしい。あやしい。
 - おもふ【思・念・憶】 (動四) (a) 思う。(b) 欲する。(c) 心配する。気にはやむ。おもんばかり。(d) なつかしむ。恋しいと思う。(e) 予想する。推量する。(f) 気が合う。親しむ。
 - おもほし 心に考え望んでいる。望ましい。
 - くしぶ (動上二) 靈妙のしるしがあらわれる。神秘的な力を持つている。

○くすばし ふしぎである。珍しい。

〔願望を表すもの〕

○たのむ【憑・恃】(動四) 頼りに思う。

○たのもし【頼】 頼みになる。頼みとしうる。

○ねがふ【願・望】(動四) 心に願う。希望する。

○ねがはし【願】 望ましい。願うところだ。

思考や願望を表す動詞から派生した形容詞は、動詞本来の意味から、ある程度の評価の意味を持つようになっていくように思われる。

③ 状態や動作・作用を表す動詞

例 いきづかし いたぶらし うるはし ゑまはし およし からはし かたむ けがらはし たたはし つからし やさし
ゆるほし よらし よろし

〔状態を表すもの〕

○うるふ【湿】(動四) ぬれる。うるおう。しめる。

○うるはし【愛・麗】①風景などが美しい。壮麗である。②容姿などが端麗・端正である。③心がうつくし。誠実である。

○けがる【穢】(動下二) よごれる。けがれる。

○けがらはし【汗穢・穢】よごれている。不浄である。

○たたふ【溢・盈】(動四) 充滿する。満ちてふくれあがる。

○たたはし【偉】 満ち足りた。偉大な。

○つかる【疲・労】(動下二) 疲れる。

○つからし【疲】 疲れた状態にある。

○やす【瘦】(動下二) 肥ユの対。やせる。身体が細る。肉が落

ちる。

○やさし 恥ずかしい。肩身が狭い。

〔動作を表すもの〕

○いきづく【気衝・息衝】(動四) ①息をつく。息をする。②苦しい息をする。嘆息する。あえぐ。

○いきづかし【気衝】 ため息が出るほど苦しい。嘆かわしい。

○ゑまふ【咲】(動四) 笑う。ほほえむ。

○ゑまはし ほほえましく感じられる。嬉しい。

○かたむ【奸】 人をあざむく。いつわる。おかす。

○かたまし【姦・奸】 心がよくない。心がねじけている。

○よる【縁・依】(動四) ①近寄る。あるものの傍へ近づく。寄ってくる。②心を寄せて人にたよる。ある人の意のままになる。

③もとづく。

○よらし よろしい。ふさわしい。好ましい。

○よろし よろしい。ふさわしくてよい。好ましく立派である。

ヨラシとも。

〔作用を表すもの〕

○いたぶる【甚振】(動四) 激しく揺れる。

○いたぶらし ひどく動揺しておちつかない。

○おゆ【老】(動上二) 老いる。年よる。

○およし 年をとった。古いこぼれた状態にある。ワカシの対。

○かかる【懸】(動四) ①かかっている。とりついている。②かかりあいになる。病気にかかることや罪に連座することという。

③よりかかる。たよる。④神が人間によりつく。

○かからはし 離れがたい。関係を断ちにくい。互いにかかり合

う。

○ゆるふ【緩・縦】(動四) ①ゆるやかになる。ゆるむ。②心がたるむ。油断する。

○ゆるほし【縦】ゆるやかである。

「いきづく」「ゑまふ」のような息をする、笑うなど、心理状態と関係づけられる類のものもあれば、「かかる」「いたぶる」のような感情と無関係のようなものもある。状態や動作・作用を表す動詞から派生した形容詞の中には、「ゆるほし」など動詞と同じ状態を表すもののほかに、「かからはし」「いたぶらし」のように感情とは無関係の動詞から派生して感情・心的状態を表す形容詞も見られる。

シク活用形容詞を派生した動詞の中に、情意や心的状態以外を表すものが存在しないわけではない。ただ、その場合でも、派生した形容詞は思った通り、願った通りになれるかどうかと評価したり、外面の状態を内面の心的状態に用いたりするなど、情意的意味を帯びることが多い。ちなみに、「かからはし」と「けがらはし」が「し」ではなく、本来は「かかる」「けがる」に存続の意を表す接尾語「ふ」が付いたものに、接辞「し」が添加したものと見られるが、ここでは拡張形の接辞「はし」が付いたものとして扱うことにする。これらの例も動詞の状態性の強さと関係あるかと考えられる。この点について、阪倉篤義『語構成の研究』(1995)では、次のように述べている。

そのかはりシ②は、「はし」といふ拡張形をとつて、

○イタツカハシ〔莫^{イタツカハシ}レ煩^{イタツカハシ}飭語〕(一九・97)

○ケガラハシ〔躬行濁^{ケガラハシ}悪〕(一・38)

のごとく、動作・作用を意味する外形的情態性の語基からも、情意的な情態を意味する語を派生することが可能であった。

『語構成の研究』p.336)

動詞の活用から見ると、四段活用が最も多く、上二段活用と下二段活用も見られる。「うらむ」の活用について、『時代別国語大辞典上代編』で「ウラムから派生した形容詞ウラメシのメが甲類であることから、古くは上一段ではなかったかと推定する説がある」と記述されている。上一段活用動詞の派生はこの一語のみである。

四段活用(18語) いきどほる いづく いとふ うらやむ した
ゑむ なつく なやむ うたがふ おもふ たのむ ねがふ た
たふ いきづく ゑまふ よる いたぶる かかる ゆるふ
上二段活用(9語) こふ くゆ さぶ なが はづ よるこぶ
わぶ くしお おゆ
上一段活用(1語) うらむ
下二段活用(4語) めづ けがる つかる やす

ほかに、「あさまし」「うるはし」「うつくし」を派生した動詞には少し疑問が残る。上代文献に動詞「浅む」の存在が確認できず、そこで、アサは浅ス(四段)の未然形で、マシは推量の助動詞とする説もある。「うるはし」は四段活用動詞「うるふ(湿)」の派生であると考えられるが、両者の意味は関係づけにくいようである。イツクーイツクシと同様に、「うつくし」の派生動詞は「うつく」ではないかとも考えられるが、この動詞は見当たらない。

かった。

2. 4 その他の語基

① 情意的意味を持つもの

〔心理状態〕

○あからし【**懇**】痛切である。いたましい。派生動詞↓あからし
ぶ

○あたらし【**惜**】惜しい。大切である。もつたない。【**考**】「あたら(可惜・恸)」形状言。惜しむべき。もつたない。派生動詞↓あたらしぶ

○いたはし【**勞**】苦痛である。骨折って苦しい。同源動詞↓いたはる

○うむがし うれしい。喜ばしい。

○うれし【**欲**】嬉しい。よろこばしい。すべて心にかない満足することをあらわす。派生動詞↓うれしぶ・うれしむ

○をし【**惜**・**愛**】①惜しい。手放しがたい。思い切つて捨てることとがむずかしい。②名残り惜しい。心残りである。③いとしい。↓をしむ

○おむがし【**欣感**】喜ばしい。うれしい。ありがたい。オモガシという形もある。

○かなし【**悲**・**哀**・**憐**】①心をうたれる。痛切に心が動かされる。身にしみて感じる。悲しい。②いとしい。派生動詞↓かなしぶ

○くるし【**苦**】苦しい。つらい。肉体的にも精神的にも用いる。派生動詞↓くるしむ

○さぶし【**不楽**】さびしい。心が鬱々として楽しまない。サビシとも。同源動詞↓さぶ

○したし【**親**】親しい。

○たくまし【**快**】気持がよい。うれしい。派生動詞↓たくましぶ

○たのし【**楽**】楽しい。快い。【**考**】古語拾遺の「言伸し手而舞」は当時の語源俗解によるもの。タノシは行動することによつて生ずる快適の感情を表す。

○はし【**愛**】いとおいしい。かわいらしい。【**考**】同じ愛情の深さをいう形容詞でも、カナシが切なさを伴つて、どうにもならない気持を表わし、悲哀を表す方向に向かうのに対して、ハシは讚美の気持を伴うものと思われる。

○むがし【**幸**】好都合である。心にかなう。喜ばしい。オムガシ・ウムガシとも。

〔思考・願望〕

○あやし【**恠**・**靈異**】①靈妙である。②不思議である。奇怪である。めずらしい。【**考**】感動詞としてのアヤは「中大兄、見_レ子麻呂等畏_レ入鹿威、便旋不_レ進曰_レ咄_{アヤ}嗟」(皇極訶紀四年)に見え、神名の「阿夜訶志古泥神」(記神代)のアヤも同じ語と思われる。クスシは靈妙・神祕の意に、アヤシはより多く奇怪・不審の意に傾くようである。派生動詞↓あやしぶ・同源副詞↓あやに(奇妙に。むりように。非常に)

○いふかし【**不審**】様子が知れず気がかりである。心もとない。同源動詞↓いふかる

○くし【**奇**】不思議である。靈妙である。クスシとも。派生動詞↓くしぶ

○くすし【**奇**】ふしぎである。靈妙である。

○ほし【**欲**】欲しい。動詞の名詞形にガのついた形、または接尾

語クをうけて用いることが多い。同源動詞―ほる

〔価値評価〕

○あし【悪】悪い。ひろく、不快・拙劣・邪悪・醜悪・卑賤・強暴なさまにいう。ヨシの対。

○いやし【賤】卑しい。賤視、あるいは卑下すべきものに対していう。

○くはし【妙・細】こまやかにうるわしく、すぐれていること。ウラグハシ・マグハシ等、複合形容詞として用いられることが多い。

〔人の性質〕

○いすかし【傲恨】性質や、やり方が曲がっている。【考】「復」や「恨」は曲がる意である。

○いそし【勤】よく勤める。勤勉だ。同源動詞↓いそぐ・いそぶ
○おだひし【穩】おだやかである。安らかである。のどかである。

【考】「おだひ（穩）」形状言。おだやかなさま。やすらかなさま。ま。し。ず。か。

○さかし【賢】賢明である。

○さだし【貞】貞節である。実直である。【考】「さだか（貞）」形状言。たしかなこと。確実なこと。サダはサダム・サダマル・サダシのサダに同じ。

○ただし【正】正しい。まっすぐである。同源動詞↓ただす

② 状態的意味を持つもの

〔存在状態〕

○うつし【現・顕】うつつである。目の前に顕在している。この

世に生きている。心持が正気である。【考】形状言ウツが形容詞に活用したもの。

○おなじ【同】同一である。変わらない。

○おやじ【同】同じ。

○けし【異】普通でない。心という語を連体修飾して用いられる例がほとんどである。

○ひとし【等】ひとしい。同等である。

○まさし【正】はつきりしている。たしかである。まことである。【考】「まさ（正）」形状言。正しいさま。条理になつたさま。確かなさま。同源副詞↓まさに

○むなし【空】①空虚である。からである。②無益である。何もしない。【考】「むな（空）」形状言。空虚なさま。内容のないさま。むなしさま。

〔時間や量〕

○あらし【新】新しい。【考】「あらしき年の始め」の例がほとんどである。上代において、アタラを語根とする語はすべて可惜の意。新の意は、アタラを語根としたが、やがて形容詞アタラシのみ音の転換を起こしアタラシとなる。

○にひし【新】新しい。【考】「にひ（新）」形状言。新しいさま。初めてであること。初々しいこと。

○なまし【生】生である。鮮度が落ちたり、枯れたりしていない。【考】「なま（生）」形状言。生きていること。生なこと。また未熟な・中途半端な意にも用いる。単独の用例はない。また、後世には、薪などが十分乾燥せず燃えにくいことをナマシという。

○にはし にわかである。あわただしい。同源副詞↓にはかに
【急・俄】(急に。にわかに。病気に用いられたときは危篤状
態をいう。)

○ひさし【久】久しい。時間が長い。【考】「ひさ(久)」形状言。
形容詞久シの語幹。長い間。長らく。

○ともし【乏】①少ない。とほしい。貧しい。②心が惹かれる。
③羨ましい。

○はげし【烈】はげしい。勢いが強い。同源動詞↓はげむ
〔生活などの状況〕

○しけし【穢・蕪】きたない意か。

○すがし 清らかである。すがすがしい。【考】「すが(昔) 昔
の交替形。直接、もしくは助詞ノを介して、複合語を作る場合
に用いられている。

○まづし【貧・貧窮】貧乏な。貧しい。【考】語幹マヅは貧ツデと同
源であろう。

○やはし【飢】飢えている。ひもじい。
〔自然環境〕

○すずし【冷・涼】すずしい。さわやかな。同源動詞↓すずむ

○いかし【嚴】①勢いが盛んである。穀物の稔りや、樹木の繁茂
や世の繁栄している状態に対していう。②いかめしい。おごそ
かである。③重大である。

○さがし【險・峻】けわしい。山や坂についていうことが多いが、
浪が高くはげしいさまにいうこともある。

○にたし 水気が多くじめじめしている。【考】「にた」①(名)
湿地。②が地形名として名詞化したもの。②形状言。柔らかく

どろどろなさま。水気が多く湿潤なさま。

ここまで、単純形式の語幹の性質について考察した。まとめて
見ると、情意的意味を持つ語幹は、派生あるいは同源の動詞が多
く存在している。動詞から派生した形容詞の場合、両者は意味的
に違いが生じることもしばしば見られる。これに対して、形容詞
と同源の動詞はもちろん、形容詞から派生した動詞は基本的には
ほぼ同じ意味を表している。また、形容詞の語幹は「形状言」から
くるもの、あるいは形容詞の語幹が「形状言」になることもある。
この場合、さらに多くの複合語を形成することができる。

状態的意味を持つ語幹は、シク活用するものも見られた。人が
自分の感覚に基づき、それを基準として事物の性質を捉える場合
にシク活用する傾向が見られる。事物の価値、他人に対する印象、
時間、空間、量、程度などの判断は個人の感覚によって左右され
る場合があるからである。

以上で示したように、シク活用形容詞の語幹に、情意的意味を
持つものが約30語、状態的意味を持つものが約20語で、その差は
思ったほど大きくなかった。しかし、動詞から派生したシク活用
形容詞の多くは情意的意味を表すため、ク活用形容詞と比べると、
シク活用形容詞は特に情意的性が強いという印象が与えられる。シ
ク活用形容詞の中で、動詞から派生した形容詞は非常に重要な位
置を占めていると言える。

3. 合成形式の語幹の性質

3. 1 畳語形式の語幹

シク活用形容詞の中には、形容詞語幹や擬声語などを重ねた形を語幹とするものもかなりある。いわゆる畳語形容詞あるいは重複形容詞である。畳語形容詞はシク活用形容詞にしか見られない。『時代別国語大辞典上代編』（1967）に見出し語として収録された畳語形容詞は20語あり、その重複要素は次のようである。名詞の重複

○うやうやし 「エヤ」は「礼」である。「うやなし（無礼）」という語もある。

○くだくだし 「クダ」は「管」であると考えられる。

○くまくまし 「クマ」は「隈」であると考えられる。

○ひねひねし 「ヒネ」は「干稲（倉に積みあげて古くなった稲）」であると考えられる。

○をさをさし 「ヲサ」は「長」である。頭を意味する名詞である。

○をし 「ヲ」は「雄」である。「めめし」もあつたと思われる。

語基の重複

○いつつし 「イツ」は「厳」である。

○おこし 「おこし」という形容詞の存在が推測できるが、語基不明。

○おどろおどろし 「オドロ」は「驚」であり、語基不明。擬声語

○おほほし 「おほし」という形容詞の存在が推測できる

が、語基不明。擬声語か。

○きらきらし 「キラ」は情態的意義をもった擬声語である。

○ごごし 「ゴゴ」は重複によって構成された擬声語である。

○すがすがし 「スガ」は「清」であり、「すがし」という形容詞もある。

○そがそがし 「すがすがし」に同じ。

○たぎたぎし 「たぎし」という形容詞の存在が推測できるが、語基不明。

○たづたづし 「たづがない」という語と関係があるなら、名詞の可能性があるが、擬声語も考えられる。

○ゆゆし 「ユ」は「斎」か「忌」であると考えられる。

○とほとほし 「トホ」はク活用形容詞「とほし」の語幹である。

○ながながし 「ナガ」はク活用形容詞「ながし」の語幹である。

動詞連用形の重複
○わきわきし 「ワキ」は動詞「別く」の連用形である。

よく言われるのは、ク活用形容詞と、その語幹が重複するものの、両者の意味的差異である。たとえば、「ナガシ」のもつ客観性に対して、「ナガナガシ」は主観において必要以上に長いと判断する気持を表し、また、「トホシ」に対して、「トホトホシ」は

その距離を眺めたりする心理状態を伴っているようである。その意味で、疊語形容詞の機能は強調とも考えられる。凹凸・高低・深淺などの状態を表す語基を重複することによって、その状態の特徴を意識させ、もしくは心理状態を伴って、情意的意味を持つようになる。

次に、重複要素が名詞である6語について見てみる。普通、「山々」のような名詞が重複する場合、「山が沢山ある」という重複を意味する。しかし、これは語幹の本来の意味にはなるが、疊語形容詞が成り立つ場合、別の抽象の意味も新しく成立する。したがって、「山々」のような単なる重複を表す疊語は、シク活用形容詞にはなりにくいと思われる。

○うやうやし【恭】礼儀正しい。

○くだくだし【細碎】こまごまして、わずらわしい。くだい。

○くまくまし 奥が深くて暗いようなさま。

○ひねひねし 久しく古い。古くひからびたさまをいう。

○をさをさし【幹・直・卓】すぐれている。はっきりしていてさとい。整ってきちんとしている。

○ををし【雄】おおしい。勇ましい。男性的だ。

「をさ(長)」は一群の人々の上に立っている統御、支配する人である。そのすぐれた統御力や判断力などのよい性質から、「をさをさし」の意味が成り立つ。「を(雄・男・夫)」は男、男子のことである。男性の持つ属性として、「ををし」は勇ましいさま、男らしいさまを表す。この二語の意味の成立は、前述した「名詞+し」の構造をとるシク活用形容詞「いさをし」と同じパターンである。

「ひね」は干稲、「くま(隈)」は曲がり角、「くだ(管)」は記載がないが、同じく具体名詞と考える。この両者も複数というより、「ひね」の古くなって干からびたさま、「くま(隈)」の入りにくんで見えにくいさま、「くだ(管)」の直接ではないなどの性質を抽出して、疊語形容詞の意味が成立したと考えられる。「うや(礼)」は礼儀の意味で、具体名詞ではないが、「うやうやし」はそれを重ねて状態の表現としたものである。

その他の語基の重複の場合、重複要素が不明であるものが多いため、疊語形容詞の意味と語基との関連性は断定できない。「すがすがし」「おこし」などの場合、疊語形ではない「すがし」「おこし」もシク活用形容詞であり、そして両者の意味はほぼ同じである。この点は、「ながながし」のようなく活用形容詞語幹の重複による主観性の介入とは異なっている。また、語基が擬声語の場合、疊語形容詞の意味は当然その聴覚から変化したものである。たとえば、「ここ」は物をすりあわせる音を表す擬声語であり、それは聴覚から視覚に転用され、「岩がごごごつてけわしい」状態を表す。「さら」は擬声語であるかは疑問であるが、それは聴覚あるいは視覚から、「姿や顔がととのつて美しい」という評価の意味を表すようになるのは確かである。「おどろ」も聴覚から驚きの情意的意味を持つようになった。ほかの語は基本的に強調と考えてよいであろう。

○いつつし 未詳。勢力のあるさまをいうか。

○おこし【沈毅】力強いいかめしい。沈着豪毅である。オコオコシ・オコシとも。

○おどろおどろし ぎょうぎょうしい。物々しい。驚くべきであ

る。

○おほほし【鬱】①ものの形がおほろである。ほんやりしている。

②心がほんやりとして晴れない。心が結ばれて物悲しい。③おろかである。ばかっている。

○きらきらし【端正】姿や顔がととのって美しい。

○こごし 岩などがごつごつしてけわしい。

○すがすがし【清清】清々しい。さわやかで快い。ソガソガシとも。

○そがそがし すがすがしい。スガスガシとも。

○たぎたぎし 凹凸・高底・深浅のある状態をいう。

○たづたづし ①たよらない。心細い。②あぶなっかしい。確かでない。

○ゆゆし【齋忌・忌】忌み慎しまれる。憚られる。神聖なもの・恐れ多いことに触れるのを遠慮する心持をあらわす。

上代語の疊語形容詞の中で、唯一動詞連用形の重複によるものは、「わきわきし」である。動詞「わく」は「わける、区別する」という意味を表し、その連用形である名詞「わき」は「区別、けじめ」の意味を表す。前述したように、語基が名詞である場合、「ほかし」のような異同を表すものは、シク活用形容詞にする傾向があるようである。この「わきわきし」は上代早くも成立したのは、その「区別する」という意味と大きく関係しているのではないかと思われる。

○わきわきし【分明】はっきりしている。きわだっている。

3. 2 その他の合成形式の語幹

①名詞／語基＋形容詞

○うらがなし 心がなし。

○うらぐはし 心にうつくしく感じられる。クハシは美妙・美麗・楽の意で、すべて美的な快感をおぼえたものについていう語。

○うらごひし【裏恋】心恋しい。ウラゴホシとも。

○うらごほし 心恋しい。

○こころがなし【情悲】そぞろに悲しい。はっきりした理由もなく悲しい。

○こころぐるし 気がかりだ。心配だ。

○こころこひし【心恋】心ひかれる。

○うただぬし ただただ楽しい。

○うただのし ただただ楽しい。

○ものかなし【物悲】何となく悲しい。うら悲しい。

○ものこひし 何となく恋しい。モノコホシとも訓める。

○かぐはし ①においがよい。香りが高い。かんばしい。②なつかしい。心惹かれる。香りの高いものに心がひきつけられることから生じたものであろう。

○なぐはし【名細】名がすぐれている。

○はなぐはし【花細】花が美しい。そのものの美しさが特に花において目立っているという意。「はなぐはし」枕詞。花の美しい意で、桜・葦などの植物名にかかる。

○まぐはし【目細】うるわしい。見てうつくしく思う。

右のように、「うら」「こころ」「うた」「もの」「くはし」の5語による複合や派生が多く見られる。このうち、「こころぐるし」と「かぐはし」の2語だけは、単独の語の意味のプラスより少し

意味の違いが生じている。「うら」「こころ」「もの」は接頭語であるが、名詞として扱ってもよいように思われる。

○うら【裏】(名) ②心。思い。心は内にこもっているものとして裏というのであろう。下・奥・底・根なども、心の意に用いられる。独立の用法は慣用的なウラモナクのみで、他は接頭語的に使われ、それもモノ悲シと同様に、何となくの意を示すことが多い。

○こころ【心・情】(名) ⑥接頭語として用い、形容詞に冠する。表面に現われず、内面だけに生ずる感情を示す。ウラにも同様の用法がある。

○うた 形状言。形容詞などに上接して、何となく・むしろに等の副詞的な意味を添え、また副詞ウタタ・ウタテなどの語基となっている。

○もの【物・者・鬼】(名) ⑥形容詞に冠して用い、何となくその感じが生じることを表す。

○くはし【妙・細】(形シク) こまやかにうるわしく、すぐれていること。ウラグハシ・マグハシ等、複合形容詞として用いられることが多い。

②動詞連用形+形容詞

○おもひがなし ころかなしい。心が傷む。

○おもひぐるし 心苦しい。思いに堪えかねる。

○きはし【欲服】 着たい。

○みがほし【欲見】 見たい。心ひかれてみたく思う。ミホシとも。

○みほし【欲見】 見たい。

動詞連用形は「おもひ」「さる」「みる」のように極めて少な

い。ここでの「おもふ(思・念・憶)」は「くを」と思う」の思考を表すものではなく、心配するなどの意である。「ほし」による複合語は、ほかに「有りがほし」が挙げられる。

その他

○しりひかし 未詳。気がかりで後より引っぱられる。後髪が引かれる思いであるの意か。

○なみだぐまし 涙ぐましい。ひとりで涙が出てくるような気持ちをいう。動詞ナミタグムの形容詞化したもの。ただし動詞の例は見えない。

○みだりかはし【妄・闌】 乱雑だ。無秩序だ。

「しりひかし」は「いきづかし」と同じく複合動詞からの派生とも考えられるが、「しりひく」という複合動詞は見当たらない。また、「ひかし」は形容詞ではない点で、他の複合形容詞と異なっている。「なみだぐまし」は接尾語「ぐまし」による派生形容詞、あるいは複合動詞「涙ぐむ」からの派生である。「みだりかはし」の「かはし」も接尾語と言われるが、いずれも生産力が乏しい。上代において接辞による派生は極めて少ない。

4. まとめ

上代語形容詞の意味から見ると、ク活用形容詞には属性を表すものが多く、シク活用形容詞には情意を表すものが多いという傾向が認められる。しかし、具体的に分析してみると、ク活用形容詞の中でも、情意的意味を持つものがあり、シク活用形容詞の中でも、状態的意味を持つものが決して少なくない。それは、事物

の属性というものは、一定の客観的な基準がある一方、個人による主観的な判断基準でも成り立つためである。時間や空間、事物の質や量の判断、人の行為に対する評価など、個人の主観が認識に影響を与えうる。したがって、シク活用することによって、この主観性がよく伝わるとも言える。

シク活用形容詞は、その語幹から見ると、動詞からの派生である場合に最大の特徴がある。その動詞は心理活動を表すものが最も多いが、それ以外に、思考や願望を表すもの、状態や動作・作用を表すものも見られた。後者には、「息づく・微笑む・涙ぐむ」など感情と関係あるものもあれば、「いたぶる・けがる」のような感情と無関係のものもある。次に、ク活用形容詞と比べた場合、情意的意味を持つ語基が多く存在している点は、シク活用形容詞語幹の特徴の一つである。しかし、実際には状態的意味を持つ語基も少なくなかった。時間・空間、質・量・程度、美しさ・汚さと、人柄・品行・性格などの人の性質、人間はこれらの状態を表す概念を認識するとき、判断側の主観性も介入しうる。ただし、心理状態を表す情意性の高いものと比べて、この類のシク活用は不安定な一面があるように思われる。「ほかし」「われじ」「しりひかし」のような、一時的にシク活用されるものも歴史の流れの中では少なくない。また、疊語形容詞もシク活用形容詞独特の存在である。その機能は基本的に強調であると考えられ、重複要素である語基との情意性の違いは、語によってさまざまである。

上代において、もう一つ注目すべき点は、自然状況と関係がある語幹の存在である。自然環境は人の生活に大きく影響しているため、道の険しさなど、本来ク活用にすべきものをシク活用にす

る傾向が見られた。疊語形容詞の中で、「おほほし」「くまくまし」「ごごし」「たぎたぎし」「たづたづし」「とほとほし」などの存在も、古代の人の生活状況と関係があると思われる。疊語形容詞や動詞からの派生形容詞の存在は、上代シク活用形容詞語構成の特徴であると思われるが、その意味表現からすると、当然のことであると思われる。

シク活用形容詞の語幹の性質と、その語の持つ意味および機能とは深く関連する。中古以降、シク活用形容詞の語幹と意味上にどんな変化が生じるのか、今後引き続き考察したい。

参考文献

- ① 『時代別国語大辞典上代編』三省堂 1967年
 - ② 阪倉篤義 「語構成の研究」角川書店 1966年
 - ③ 峰矢真郷 「国語重複語の語構成論的研究」塙書房 1998年
 - ④ 村田菜穂子 「形容詞・形容動詞の語彙論的研究」和泉書院 2005年
 - ⑤ 山本俊英 「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」『国語学』第三号国語学会編 1955年
 - ⑥ 山崎馨 「形容詞さかし・さがし考」『松村明教授還暦記念』国語学と国語史 明治書院 1977年
 - ⑦ 于艶麗 「上代シク活用形容詞に関する考察」『立教大学大学院日本文学論叢』(第9号) 2009年
- 遼寧省教育庁人文社会科学一般項目 L201646

(う えんれい) 瀋陽航空航天大学日本語科講師)

表1 上代語ク活用・シク活用形容詞の語構成比較

上代語ク活用	156	上代語シク活用	142
語基+シ	67	語基+シ	51
動詞未然形+シ	7	動詞未然形+シ	39
		動詞未然形+ハシ	2
		名詞+シ	4
		副詞+シ	3
単純形容詞	74	単純形容詞	99
		名詞の重複+シ	6
		語基の重複+シ	11
		形容詞語幹の重複+シ	2
		動詞連用形の重複+シ	1
豊語形容詞	0	豊語形容詞	20
名詞+形容詞	19	名詞+形容詞	11
語基+形容詞	6	語基+形容詞	2
形容詞語幹+形容詞	2		
動詞連用形+形容詞	5	動詞連用形+形容詞	5
複合形容詞（豊語を除く）	32	複合形容詞（豊語を除く）	18
接頭語による派生形容詞	[8]	接頭語による派生形容詞	[2]
カ+形容詞	2	モノ+形容詞	2
サ+形容詞	2		
タ+形容詞	4		
接尾語による派生形容詞	[42]	接尾語による派生形容詞	[2]
語基/名詞+ナシ	29	名詞+グマシ	1
語基+ケシ	13	動詞連用形+カハシ	1
派生形容詞	50	派生形容詞	4
その他	0	その他	1

(筆者作成)